



三 二次元戦争勃発

「どうです。地上の様子は？」

オレンジ神様は体を反らしながら地上を見つめる。

「最近、近くの方が見えづらくて、こうして、少し、頭を後ろに下げているところです」

「そうですか。それは私も同じです。神も何万年も、何十万年もするもんじゃないですな。そろそろ、お役目御免といきたいものですよ」

「それができないから神なんです。まだ、私たちは若い方ですよ。この地球ができてから生まれたんじゃないですか。ゴールド神様シルバー神様は、この宇宙ができたビッグバンの前から、生きているという話ですよ」

「ほう、それはすごいですね。それこそ、地球なんてあまりにも近過ぎて、わからないでしょうね」

「私たちが早くそうになりたいものですね。そろそろ、地球のお目付け役から解放されたいですよ」

「だけど、私たちの後任者はいるのですか？」

「最近、単色じゃなく、虹色のような、様々な色が混じった服を着た若い神様たちがいるから、その方々に任したいものですね」

「それが、今の流行色ですか」

「さあ、それはよくわかりませんね」

「神様も世代交代ですね」

「それが世の習いですよ」

「それよりも、地上の方はどうなっていますかねえ」

グリーン神様もオレンジ神様以上に体を逸らしながら地上を見つめる。

「今のところ、オレンジ神様の思うように進んでいますよ」

「いいや、何があるのかわからないのが、人間の世界ですよ。私たち神様の世界は全て予定調和ですけどね」

「ははははは。予定調和に持って行くんでしょう？」

「そうとも言いますね」

「それにしてもお腹がすきませんか？」

「それじゃあ、見物はこれくらいにして、ブルー神様が経営するレストランでも行きますか。そこは、パスタが美味しいと評判ですよ」

「それは、いいですね。でも、それより先に、オレンジ神様の勝利宣言でビールで乾杯しますか」

「いえいえ、まだ、勝負はわかりませんよ」

グリーン神様とオレンジ神様は、雲の隙間から地上を覗くのを止め、笑いながら二人連れだつて雲から張り出したデッキのある青色のレストランに向かった。

「お待たせしました。ご注文の品です」

店のウェイトレスが、スパゲティとピザとドリア、ビールとジュースを運んできた。パパは新聞を下ろし、ママは雑誌を閉じた。

「あら、まあ、たくさん描いたわねえ」

ママは、僕が描いたオレンジタウンとグリーンタウンを見て驚いた。

「おっ、ハヤテは画家になれるぞ。いや、それとも、建築家かな」

パパは、ビールを一口飲みながら、軽口を飛ばす。パパは既に自家発酵しているのだろう。僕たち三人は、目の前のご馳走に集中した。

「お食事中、すいません」

オレンジさんがそれこそすまなそうに話しかけてきた。

「神様のおかげで、このオレンジタウンは生活する家などが一通り揃いましたが、まだ、十分でない住民からの強い要望があります。神様は、今、お食事中ですので、これ以上、お手をわずらわすことはできません。もし、よろしかったら、そのオレンジのクレヨンをあたしに貸していただけませんか？」

「私も同様です」

グリーン氏も大きく頷く。

僕はフォークの傍に転がっている、まだ半分以上残っているクレヨンを見た。

「君たちも絵が描けるの？」

「ええ、やってみます」

「やります」

僕はオレンジさんの手にオレンジのクレヨンを、グリーン氏の手にグリーンのクレヨンを渡した。

「ああ、これは重いですね。さすが、神様は力持ちですね。軽々と、こんなに重いものを持っていたなんて。特に、二次元のあたしたちが、三次元の物体を持つのは並大抵のことじゃありません。でも、自分たちの街づくりは、いつまでも神様に頼るわけにはいきません。自分たちのことは自分たちでやります。それでは、しばらくの間、このクレヨンをお借りします。神様はご家族と一緒にゆっくりとお食事を楽しんでください」

「そうです。楽しんでください」

二人が同時に深々と頭を下げた。

僕は二人にクレヨンを渡すと、パパやママとの三次元の会話に戻った。時には、自分ひとりで、四次元の空想の世界を楽しんだ。

オレンジさんとグリーン氏は、それぞれの色のクレヨンを手につくと、早速、今までなかったもの、自分たちが欲しいものを描き始めた。学校、病院、電車、バス、工場、高速道路、公園、お城、などなど。

最初は、自分たちが必要な物を描いていた。そのうちに、隣の街を見て、自分たちの街にないものを真似して描き出した。オレンジタウンが街のシンボルであるオレンジタワーを描けば、「私たちがタワーが欲しい」と、グリーンタウンは、同じく、グリーンタワーを描いた。

グリーンタウンが巨大な遊具施設が整備されたグリーンランドを描けば、「あたしたちも、アミューズメント施設が欲しい」と、オレンジタウンもオレンジランドを描いた。建物や施設だけではない。

オレンジタウンの人々が、オレンジ色を讃える「オレンジ教」を設立すれば、「私たちが緑色を誇りに思おう！」と「グリーン教」のPRに努める。

グリーンタウンの人々がグリーン色の素晴らしさを映像化した「グリーン映画祭」を開催すれば、「あたしたちの方が色彩だけでなく、音感的にも優れている」と、「オレンジ音楽祭」の開催に向けて動き出した。

オレンジタウンとグリーンタウンは、互いに競い、街中を、オレンジ色、グリーン色で塗りつぶした。当初の、街をよくしようと言う考えよりも、隣町に負けないため、自分たちが優れていることを示すために、クレヨンは使われ始めた。

テーブルの上の画用紙の空白の部分は、ほとんど埋め尽くされ、オレンジ色と緑色の二色に覆われてしまった。それでも、オレンジタウンの人々は、オレンジのクレヨンを使いたかった。グリーンタウンの人々も同じ気持ちだった。

ある時、オレンジタウン側が、オレンジタウンとグリーンタウンの境界のギリギリにまで、オレンジ色を塗ろうとした。オレンジタウンとグリーンタウンは、お互いの領域を決め、衝突がないように、テーブルの真ん中は色を塗らず、空白地帯、つまり、互いの安全地帯、平和地帯にしていた。

でも、オレンジタウン側の言い分としては、家だって塀があるように、街にだって壁が必要だ、ということで、国境を作ろうとした。

最初は、真中から、一センチ程度離れた所に線を引く、つまり壁を描いたが、線を引いていた人間が力を入れ過ぎたため、クレヨンが誤って滑り、真中を通り過ぎ、グリーンタウン側に侵入してしまった。目の前のグリーンの一軒屋がオレンジ色でまっぶたつになった。

「あー、体の真ん中がオレンジ色になっちゃった」

机の前で勉強していたお姉ちゃんのグリーン中学生が驚いて天井をみつめる。天井にもオレンジ色の線がはいっている。

「お姉ちゃん。僕もだよ」

ソファーに寝転がってマンガを読んでいた小学生の弟は、フローリングを走るオレンジの線を見つめる。

慌てたオレンジタウンの人が、もう一度、グリーンの家を往復するが、オレンジ色が広がるだけだった。クレヨンの色を消す消しゴムは持っていないからだ。ついに、グリーンの家は、オレンジ色に塗り替えられてしまった。当然、中に住んでいるグリーン人も、オレンジ人に塗り替えられてしまった。

「あー、こんな体じゃ、明日から、グリーン中学校に行けないわ」

「僕だって、グリーン小学校に行けないよ」

こうして、意図せずして、オレンジタウンは少し広がった。

それを見たグリーンタウンの人たち。自分たちの街がオレンジタウンの人々によって、侵略されたとのニュースが流れた。急いで、緑色のクレヨンで、オレンジ色に変わった緑色の家を緑色で上書きする。オレンジ色の家は緑色に戻った。中に住んでいる家族も全員緑色に戻った。

「あー、元に戻れたわ」

「僕もだよ」

「あー、明日から、グリーン中学校の制服が着られるわ」

「よかった。僕も、これまでどおりグリーン小学校の友達と遊べるよ」

オレンジタウンの人々から、家を取り戻したグリーンタウンの人々は歓声を上げた。でも、オレンジ色に変えられた家などを緑色に戻すだけでは、いたちごっこに過ぎないとの意見が出た。

「それなら。こちらから、オレンジタウンに侵入して、オレンジタウンを全て、グリーンに塗り替えてやろう。そうすれば、こうした無意味な戦いが行われなくなる」

「そうだ、そうだ、変えてしまえ」

「やられる前に、やっちまえ」

シュプレヒコールがグリーンタウンの街全体に響き渡った。

グリーンタウンの人々は、オレンジタウンを攻め、オレンジ色を緑色に塗り替え、自分たちの街の領土を増やそうとした。だが、オレンジタウンの人々も負けてはいない。グリーンに塗り換えられた建物や道路などを、オレンジ色で塗り、自分たちの街を取り戻した。

それだけではない。反対に、グリーンタウンに攻め入って、緑色の木や公園をオレンジ色に塗り変えた。

こうして、グリーンタウンとオレンジタウンは、互いの街をそれぞれの色で塗り替えようとするが、すぐさま、相手の色に戻された。一進一退の攻防が続く。互いの街の境界は、毎日、毎時間、毎分、毎秒ごとに出たり入ったりする。まさに、ふくらんだり、ちじんだりするぷにゅ現象だ。

「さあ、お腹が膨れたことだし、地上の様子はどうかな。私の勝ちはあるかな」

オレンジ神様は、福の上からお腹をさすりながら、少し体をそらしながら雲の隙間から地上を覗いた。

「やや。状況が変わっているぞ」

グリーン神様は目を大きく開いたり、細めたりして、状況を把握しようとする。

「どれどれ。本当だ。さっきまで、仲良く、自分たちの生活を楽しんでいたのに、今では、戦

争じゃないか」

「やはり、グリーン神様の言うことの方が正しかったのですかな」

「いやいや。勝負は、最後までわかりませんよ」

オレンジ神様とグリーン神様は腰を下ろしたまま、食後のコーヒーを飲みながら、地上の様子を見続けることにした。

テーブルの中の二次元の人間たちの壮絶な争いがおこっているにも関わらず、テーブルの上では、三次元の間人たちが、安全、安心の状態で、安心、安全な食材で作られた食事を楽しんでいた。

「おい、ハヤテ、スパゲティは美味しいか？」

「うん。このトマト味が大好きなんだ」

僕はチキンドリアを食べ終わった後、スパゲティのミートソースを注文した。成長期の僕にとって二杯目は当たり前だ。それに、スパゲティの専門店では、やはり、ミートソースだ。ミートソースを食べれば、その店の本当の味がわかる。

それは、うどん店で、かけうどんを注文するのと同じだ。天ぷらやおでんなどでごまかされない、うどんの本当の美味しさがわかるのは、かけうどんなんだ。これも、どこかの誰かからの受け売りだけど。

「あらら、もっと上品に食べなさいよ。口の周りに、トマトケチャップがついているわよ」

「へえ。それじゃあ、僕は、野菜の吸血鬼だ」

「あははは、それは面白い」

しまった。僕はパパが喜んでくれるものだから、口いっぱいスパゲティをほうぼうとしたら、画用紙のクロスの上にスパゲティを数本落としてしまった。

落としたところは緑色で塗られたテーブルの方だった。僕は慌てて、スパゲティを拾おうとした。そして、クロスをじっと見つめる。

いやに、さっきよりも、画面が緑色で覆われたような気がする。まさか、本当に、緑色のクレヨンで自分たちの街を描いたのかな。

左側のオレンジ色の方を見る。こちらも、緑色に負けないくらいに、オレンジ色が塗り固められている。ただし、イルミネーションが点滅するみたいに、オレンジの部分が緑色に、緑色の部分がオレンジ色に刻々と変化している。僕の目の錯覚か？でも、きれいだ。

「きゃー。上から何か落ちてきたわ。あれ、体中がオレンジ色になっちゃった。どうしよう？」

「待っている。すぐ、グリーン色に戻してやる」

グリーン色の夫は、グリーン色のクレヨンのかけらを持つと、オレンジ色に塗り替えられた妻を元のグリーン色に戻そうとした。

「もういいわ。あたしはもう既に、オレンジタウンの人間よ。あたしと一緒に暮らしたいのなら、あなたもオレンジ色になればいいよ」

妻はクレヨンを持つ夫の手を遮ろうとした。

「どうしたんだ。オレンジタウンの誇りを忘れたのか」

「そんなもの、昔からないわ。今、体がオレンジ色に変わってわかったの。体がグリーン色だから、グリーン色の考え方しかできないのよ。オレンジ色になれば、オレンジ色の素晴らしさがよくわかるわ。反対に、グリーン色の汚らしさもよくわかったわ。もう、あたしは、これからオレンジ人間として生きて行くわ」

「これまで、二人がグリーン色として生きてきた人生はどうなるんだ。全く、無意味で、無駄だったことか？」

「それはあなたの問題でしょう。あたしは生まれ変わったのよ。これから、あたしはあたしの人生を生きるわ。もし、これまでどおり、あたしと一緒に暮らしたいのなら、あなたもオレンジ色に変わらなさいよ」

「くそっ、なんてことだ」

激怒したグリーン色の夫は妻の言い分を聞いて、グリーン色のクレヨンのかけらを再び持つと

、オレンジ色に変わった妻の体をグリーン色に塗り替えた。

妻は、再び「きゃー、何をするの」と叫び声を上げた瞬間、「ありがとう。あたし、やっぱりグリーン色がいいわ」と夫の体に抱きつこうとした。

夫はその妻の体を押し分けると、落ちてきたスパゲティのトマトケチャップを手のひらで掬うと、おもむろに自分の体全体に塗り始めた。

「どうしたの。どうしてそんなことをするの？」と、夫の体に再び抱きつこうとする妻。

グリーン色の夫はその体を思い切り突き飛ばすと、自分の体をオレンジ色に塗り替えた。そうして、心も体もグリーン人になった夫は、「それじゃあな」と、妻に別れを告げ、国境を越えオレンジタウンの方に走り去った。

「どうして、どうして」

妻はしゃがみこんで、ただ泣き叫ぶだけだった。でも、ひとしきり泣き、少ししょっぱいグリーン色の涙が乾くと、

「まあ、仕方がないわね。また、新しいグリーン色の男を捕まえればいいのよ」

と一言呟き、オレンジ色に住まった家をグリーン色のクレヨンのかけらで塗り直し始めた。